

平成 17 年 7 月 21 日

大阪高等裁判所民事 5 部 1 係 御中

陳述書

川戸 佳代

平安女学院大学現代文化学部国際コミュニケーション学科に在籍する私は、以下のとおり陳述いたします。

びわ湖守山キャンパスのオープンキャンパスへの参加

私は、2001 年 8 月、びわ湖守山キャンパス（以下「守山キャンパス」と略します）で行われたオープンキャンパスで施設案内等の事前説明を受けて、君島教授の熱心な誘いのもとエントリーをしました。オープンキャンパスに参加した私は、大学での学生生活がより充実したものになるように多くの情報を集めようと思いました。そして、私は 2001 年 8 月に守山キャンパスで行われたオープンキャンパスに親、友人、そして友人の親との 4 人で参加しました。その際にも、それ以降にも守山キャンパスが移転するといったことを一切聞かされることも無く入学しました。キャンパス統合の報道後の経緯については別紙の通りです。

オープンキャンパスでは「キャンパスツアー」という施設案内という事前説明を受けました。入試課職員の喜多さんに連れられ、レクジムセンター（体育館）や講義棟等を案内されました。レクジムセンターでは、真新しいフロアに触れて「いいですね」と職員に話しかけたことを覚えています。私は、スポーツをしていたため、体育館などの施設にはこだわりがありました。私は、高校

時代に全治1ヵ月以上のケガのため（右足首骨片摘出、靭帯を繋ぐ）手術・入院・リハビリをしています。そのため、テーピングをしてサポーターをしなければ危険（再度靭帯断裂の可能性）なため、レクジムセンター（体育館）のフロアが滑るか滑らないかということは私にとって重要なことでした（正座をすることやヒールのある靴を履くこと等、危険な行為は医師から一生禁止されています）。私は、このことがあるからこそ、バリアフリーで移動のしやすい、人にやさしいキャンパスに入学したのです。

守山キャンパスは、平地に建てられた施設です。『2001年大学案内』（甲1号証）P、27・28「施設紹介」の箇所には、守山キャンパスは「全施設バリアフリー、人にやさしい先進の学習環境を整備」と書かれていますが、その通りでした。私が現代文化学部に入學する前に案内された守山キャンパスは、全ての施設（講義棟・研究棟・レクジムセンター・生涯学習センター・情報メディアセンター・学生会館）がバリアフリーになっている、とても新しく人に優しい校舎が建つキャンパスでした。

その後案内された講義棟では、教室の中まで案内され「少人数制クラスで学べます」と説明を受けました。私は「少人数制というのは、どれくらいですか」と尋ねました。すると職員は「大体10人から15人くらいです」と答えました。私が「校舎だけでなく、机とかイス、黒板までが全部新しいんですね」等と言うと、職員が「そうです。入学したらここでこれが使えますよ」と自慢げに言った言葉が強く印象に残りました。また、「クーラーもあるんですね」というと、職員は「全教室にありますよ」と言っていました。

私たちは、その後、食堂で教員らによる守山キャンパスの説明を1時間余り受けました。その場には、斉藤教授、君島教授、塚本教授、C.ケリー教授らがいました。親と私が席に案内されると、斉藤教授、塚本教授、C.ケリー教授が対応しました。そこで、私の親が平安女学院の同窓生で、1967（昭和42）年に平安女学院幼稚園の園長に就任した元院長・学長兼任の酒井氏を知っていると話し始めると、君島教授が呼ばれてきました。再び、私の親が酒井元院長・学長兼任の娘さんと同級生でよく知っている等と、平安女学院にお世話になったことを話し始めると、君島教授は、その「酒井さんの娘さんは、現在、幼稚園にいらっしゃいます」などと言いました。私の親は喜んでいる様子でした。そ

のうち、君島教授は後ろに置いてあったAO入試の申込用紙を差し出しました。「これを書いて下さい」と君島教授に言われた私は、その15センチほどの青い用紙にサインしました。

このように施設案内を含めた事前説明が終わり、私は申し込みを済ませました。その席で、突然C・ケリー教授が、私の服を指さして「ARMY」と言っていました。そのため、私は当日自分が着ていた服もはっきりと覚えています。

私は、オープンキャンパスに参加した日、守山キャンパスの向かい側に位置する飲食店でお昼にカレーを食べました。キャンパスを出て1分もかからない所でカレーが食べられるなら、食堂の料理が合わなかったり飽きたりした時には十分だなと思いました。むしろ、贅沢なぐらいです。また、守山キャンパスは自然に囲まれたキャンパスで、甲斐前市長が言うように、琵琶湖を望むとても良い所です。私は、オープンキャンパスに参加するため初めて守山キャンパスに行った時に、キャンパスの中にとっても強い風が吹くことを知りました。2002年大学案内(甲第3号証)に記載されている「Lake Side Campus Lake Biwaの風を感じて」という言葉は、この事だと思いました。私は、このキャンパスは、びわ湖の風によって、とても涼しい所で良い環境だなと実感しました。言うまでもありませんが、高槻キャンパスは大阪府高槻市にあり、琵琶湖の風を感じることはできません。

些細な事のようにですが、このようにキャンパスを取り巻く周辺地域の環境というのも大学への進学希望者が希望する大学を選ぶ際に考える重要な点です。当然の事ですが、周辺環境という言葉には住民も含まれています。このような事は、オープンキャンパスに参加したからこそ得られた情報だと思います。その大学に関する情報を集めようとするならば、キャンパスに行くということはとても重要なことです。キャンパスに行かないで入学を希望する受験方法ももちろんあります。例えばセンター試験のように、全国に設置された試験場で受験をして入学する方法もあります。私が守山キャンパスのオープンキャンパスに行ったのは、2001年6月頃に学院側から私の母親宛に届いたダイレクトメール(葉書)がきっかけでした。この同窓生宛てに送られた葉書には、「ご息女を紹介していただきたい」といった言葉が書かれていました。このダイレクトメールを受け取ってから、私は高校を通じて大学に資料請求をしました。その

とき受け取ったのが、2001年大学案内や募集要項など（甲第1号証、甲第2号証、甲第3号証）です。私はこれらの資料を見てオープンキャンパスに行きました。

オープンキャンパスで事前説明を受けた後、入試の申し込みをした私は、後日、2度にわたる面接を受けました。私は、志望動機書類には当時の坂口学長の「地域に開かれたキャンパス」（2002年大学案内甲第3号証）という言葉を用いて次のように書きました。「地域に開かれたキャンパスという校風が気に入って入学を希望しました。」

2度にわたる面接の様子はつぎの通りです。

私が守山キャンパスに着くと、入試課職員の林さんが応対してくれました。とても優しい方でした。林さんに案内され、食堂のある学生会館で待機するように言われた私は、緊張しながら呼ばれるのを待ちました。「行きましょう」と林さんに言われ、研究棟の2階に案内されました。研究棟に入ると、学生さんが数人集まり、1階の廊下に大きな紙を広げていました。2階のラウンジに着くと林さんは「大学祭の準備したはるねん」などと話してくれました。私は研究棟の2階のラウンジで2、3分の間、準備が出来るのを待っていました。私は林さんに面接会場へ案内されました。

「失礼します」と言って扉を開けると、松澤員子学科長と君島教授が座っていました。面接が始まりました。松澤員子学科長に「クラブはやってますか」と聞かれたので、私は高校生活における部活動の話をしました。すると、松澤教授は、「まだバスケットボール部が無いので、是非、入学したら立ち上げてほしいと思います」と言われました。私は、その言葉に「頑張ります」と言って答えました。（バスケットボール部が設立されていなかったのは、守山キャンパス（現代文化学部）だけでした。）終わりに松澤学科長から「英語をマスターしたらどんなことをしたいのか」という題名で作文を提出するように求められました。君島教授からは「お母さんに何か平安女学院の事で聞いていることはありますか」と聞かれました。私は、「自立した女性を育てることが平安女学院の精神だと聞いています」と答えました。また、松澤学科長には「将来、どんな仕事につきたいと考えていますか」と聞かれ、私は「まだ、やりた

い仕事を見つけれられていません。平安女学院大学守山キャンパスで生活する中で見つけたいと思います。具体的には自慢の体力を生かして働ける仕事をしたいです。」等と答えました。松澤学科長は「やりたい仕事を高校生のうちに見つけている人は少ないです。地域に開かれたキャンパスということで平安女学院大学は先生、学生、市民との関係が密なので、わからないことがあればどんどん先輩に聞いてください」等とおっしゃっていました。

2度目の面接日には、正門前に「編入学試験」という立て看板がありました。「編入学試験」が実施された日でもありました。その日は林教授と中邑助教授による面接でした。私は前に提出を求められた課題を提出しました。

2度に渡って行われた面接において、入学希望者が高槻キャンパスで学ぶことになるかもしれないという話は全くありませんでした。私自身、高槻キャンパスで学ぶということなど想像したこともありませんでした。現代文化学部に入学を希望するということは、守山キャンパスで教育を受けるという明確な前提条件であったと思います。その証拠に、私の学生（身分）証には、「びわ湖守山キャンパス 有効期限：2006年3月31日」と記載されています。

AO入試について

私が選択した入試形態は、「AO入試」と呼ばれています。『平安女学院大学 現代文化学部 募集要項2002』に記載されているAO入試 期のエントリー期間は2001年6月17日（日）～9月28日（金）（「募集要項2002」P.2 甲第2号証）です。入試の流れは次のとおりです。

【AO入試の流れ】

事前説明



エントリー（書類を提出）



本面談（1）



第一次選考：通過者に課題を提示



本面談（２）：提出した課題をもとに面談



第二次選考：課題・面談から審査



ＡＯ入学者リストに登録：登録者には認定を通知



▼ 登録者のみ出願可（検定料３０，０００円要）



出 願：指定期間内に願書（専願）を提出



合 格

「ＡＯ入試」は、対話式の入試。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝

平安女学院大学入試委員長 田

淵創

「ＡＯ入試」を分かりやすく表現すると、「対話式の入試」と言えます。
それは、期間を設定して私たち大学側とじっくり話し合い、自分の適性や進路
を考えた上で入学を決めることができる入試だからです。部活動やボランティ
アなどの実績がある人、資格を取得している人、初めて会った人にでも積極的
に自分の考えや思いを伝えられる人は、「自己推薦入試」という選択肢もありま
す。でも、情熱やビジョンは持っているが、短い時間で説明しきれない人、時
間をかけて自分の意欲を伝えたい人は、「ＡＯ入試」が向いていると思います。
また、「ＡＯ入試」は、大学側が選ぶためだけのものではありません。
話し合いの中から、あなた自身が本当に自分に合った大学なのか判断できるい

い機会でもあるのです。私たちもあなたをより深く理解する。あなたも大学を見極めることができる。

それが、「AO入試」の特徴と言えるでしょう。

(出典：平安女学院大学『アグネス e-レター』第2号 2003年6月21日号

<http://www.melmaga.info/heian/list.asp?PMODE=DD&W=87>)

AO入試は、希望した学部にはしか入れないという「専願方式」です。AO入試は、専願方式であるため入学試験に合格したら、守山キャンパスの現代文化学部国際コミュニケーション学科にはしか入学できません。もちろん、他の大学の入学試験は受けられません。専願とは異なり、併願ならば入学試験の得点などによって受験した大学の別の学部に入学することが出来ます。しかし、AO入試は専願なのです。このことから、AO入試によって入学が認められるということは、守山キャンパスの現代文化学部で学ぶということが限定されていることがわかります。それではなければ「専願方式」とはならないからです。また、AO入試は他の入試方式とは違って出願書類を最後に提出します。AO入試は受験生に対する事前説明を重視した入試方式です。そのため、AO入試の特徴は、オープンキャンパスなどから出願後まで長期間をかけることだとされています。それは、大学側が入学希望者を審査するだけでなく、入学希望者側も時間をかけて大学を知るといった事前説明のプロセスが両者にとって重要であることを意味します。

地域の人々と共に学ぶことができる守山キャンパス

統合による就学場所の変更は、私たちの「学び」に大きな変化をもたらします。それは研究方法等の変化です。個々の学生にはそれぞれの学び方や研究方法があります。守山キャンパスの現代文化学部には在籍する私たちの学びには守山という地域の人々が重要な存在となっています。他の学生の陳述書にもあるように、現代文化学部では守山市において展開されている学びがたくさんあります。たとえば、私が卒業単位取得のために選択した「現代社会論」は、守山市民講座(「わたし発見・いきいきセミナー(全10回)」)として市民に対して

も開講されていきました。このような講座において、学生は地域住民と共に学ぶことができます。この授業において、私は大教室で市民と共に学びました。その授業内容は、一つのテーマに対して約6人の受講生がグループになって意見を出し合うものでした。各グループの構成メンバーは学生3人と市民3人でした。人生の先輩が与えられたテーマについてどのような考えを持っているのかなど、私たち学生にとって市民の方々の意見は大変勉強になりました。また、学内で公開講座に参加された一般の方が、私に「301 はどこですか」と教室を訪ねられたりすることがありました。私は、教室を案内することによって、守山キャンパスを誇りに思っていました。些細なことですが、人と人との関わりについて学ぶコミュニケーションを専攻する私たちにとって、地域に開かれた守山キャンパスは、授業で学んだことを実践する場所でもあるのです。

食堂も市民の方々と出会うことができる場所です。ある日、食堂(学生会館)で食事をしている子供連れの家族がいました。子供たちは、フライドポテトを嬉しそうに食べていました。そして、食事が終わると食堂の中を走り回り楽しそうにしていました。私はその子供と一緒に遊びました。食堂の券売機の前では市民の方から「どれがおいしいですか」といわれ、「どれもおいしいけど、定食がおすすめですよ」等と答えることもありました。「人に仕える」という平安女学院の素晴らしい精神は、このような機会を通して育まれるのではないのでしょうか。また、食堂には福祉施設から来たお年寄りの方々もおられました。中には、車いすを利用しているお年寄りもいて、福祉学科の学生がサポートしていました。私は福祉学科の学生ではありませんが、キャンパス内にお年寄りがいることで福祉学科の学生が学んでいることにとっても関心を持ちました。

しかし、統合の決定によって、市民と交流することができるこのような貴重な場は失われます。統合が決定されてから公開講座に参加した市民からは、「とってもいい所なのにな」という声を多く聞きました。守山キャンパスの正面の田畑で農作業をしていた住民の方は、「学生がいなくなってしまうなんてな～。学校みたいな所は、少なくとも10年は続かんとあかんのにな」とおっしゃっていました。この方のおっしゃる通りだと私は思います。私たち「平安女学院大学守山キャンパスの存続を守ろうの会」のメンバーは、署名活動を通じて、市民との交流をさらに深めることができました。署名をしてくださった方から、

「平女ってどこにあんの？一回行かなあかんと思ってたけど、一度も行った事無いわ」と言われましたので、私は、「地域の方に食堂や図書館は一般開放されているので気軽に守山キャンパスに来てください」と答えました。署名活動を行うなかで、多くの市民や県民が守山キャンパスを必要としていることを実感することができました。守山市と滋賀県が多額の補助金を出してくださったからこそ守山キャンパスが設置され、私たちが一般市民の方々と共に学べることができる、この事を私はとても嬉しく思います。私はこのキャンパスで多くの思い出をつくりました。2004年までは、学生の学内アルバイトとして草刈が行われていました。友達と共に学内アルバイトを率先してやった私は、自分の通う大学の駐車場をつくることができ、とても嬉しかったです。友達と真夏の日に大汗を掻きながら作業をしました。これは貴重な体験でした。

守山キャンパスの学生は、守山市の銀座商店街「HATI」において子供たちを対象にした英語教室や喫茶室などの活動を通して市民との交流を行ってきました。そして、何と言っても大きなイベントは、1万人以上の市民を巻き込んだ大学祭です。大学祭では、毎年クラス単位で模擬店を出しました。私が2年生の時に出した「わなげ屋」は子供たちに大人気でした。景品を獲得できなかった子供にも大人にも景品のサービスをして喜ばれました。私も大変楽しかったです。そして、夏休み期間にはキャンパス近くの市民運動公園で開催されたフェスティバルにボランティアとして参加したこともあります。私のビジネスインターンシップの実習先は守山市内ではありませんでしたが、実習先の多くが守山市（たとえば守山市役所）やその近辺の地域にありました。福祉学科の学生の多くは地域における福祉施設で実習を行っていました。

キャンパスからは琵琶湖の対岸が見えます。私は、このことをオープンキャンパスの際に初めて知りました。キャンパスからは四季折々の景色、（比叡山、比良山など）を楽しむことができます（これらは講義棟の3階に行くと綺麗に見えます）。守山キャンパスから駅に向かうとき、様々なものが目に飛び込んできます。キャンパスの正門を出ると直ぐに川が流れています。その川には、小魚がたくさん生息しています。そんな静かな環境を見ていると、心が豊かになります。このような自然に恵まれた守山キャンパスで学ぶことは、私にとってとても幸せなことです。守山駅から守山キャンパスまでは、直通バスで7分

程度です。駅からは徒歩で30分程度です。歩くのが楽しいと言って、駅から歩いて通う学生や教職員もいます。私は、時々守山駅から徒歩で通う学生と駅まで一緒に歩くことがあります。

私の「学び」に重要な守山キャンパスという環境

このような静かな環境に守山キャンパスは位置していますが、学生のアルバイト先はたくさんあります。私が知る限りでも、守山駅前の飲食店「笑笑」、キャンパス近くのスーパー「丸善」、大型スーパー「ららぽーと」、「平和堂」、「アヤハディオ」、「カメラの北村」、「郵便局」などです。なかには守山市内で「家庭教師」をやっている学生もいます。そして、下宿生にとってありがたいのは物価が安いという点、アパートの賃貸料が他の街に比べて安いことです。このような良い環境のなかには、当然地域の「人」が入ります。守山キャンパスの食堂で働く人たちは地元の人ばかりです。このキャンパスの食堂の大盛りのカレーライスは私の好物で、私はほとんど毎日食べていました。食事を済ませ、「ごちそうさまでした」と言って私が食器を返却口に返しにいくと、いつも「ありがとう」と温かく声をかけてくれます。そのあと、今日はどうだったという話や、これからどんな授業を受けるのかといった話をたくさんします。食堂で働く人たちは、私たちがこの授業ではこんなことを勉強している、と話すと興味深く聞いてくれました。また、守衛さんは、とても優しく帰りが遅くなった時には必ず「気をつけて帰るんやで」と行ってくれます。守衛さんは、キャリアサポート（就職支援）課の職員ではありませんが、就職のことや将来についてアドバイスをしてくれます。そんな地元の人々の温かみが私を育ててくれました。私の学びは、ここにあるのです。それは、入試の際に学科長がおっしゃった事を実践して築き上げた学び方です。私は、職員さんまでもがこのように温かく見守ってくれる学校を他に知りません。私が入学したときにいた教職員の多くが辞めていってしまうなか、守山キャンパスで働いている地域の人々の温かみは私にとって大きな励みになっています。このように守山キャンパスで私が築きあげた環境を失いたくありません。常に地域の人たちが守山キャンパスの中においてコミュニケーション（交流）ができること、それが現代文化学部国際コミュニケーション学科に在籍している私の学び方です。

私が入学前に示された学生生活は、このように守山キャンパスで学ぶことでした。私たち「平安女学院大学守山キャンパスの存続を守ろうの会」は入学前に学院側から示された守山キャンパスでの教育環境が守られるべきであると思いい、守山キャンパスの存続を求める活動を行ってきました。守山市長は12月議会で「…もっと立地の悪いところでも、たくさん学生が集まって立派な大学経営をされているところはございます。これは、やはり経営の怠慢としか私には考えられません」と述べています。このような、経営努力を怠った学院側は、守山キャンパスにおける私の「学び」を奪いました。もし、原判決で示されたような学院側の主張が認められるとするならば、入学したキャンパスで卒業することを保証されない学生が今後多く出るでしょう。それは、2007年には、大学全入時代(2007年に入学者と入学志願者が同数になると試算されている)を迎えるからです。私は、私たちのような被害にあう学生が今後出てほしくない、という気持ちでいっぱいです。

これからも守山キャンパスで学びたい、それが研究活動を行う学生という立場にある私の訴えです。

以上